



2023年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2023年11月～2024年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「やや高め」～「かなり高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ: 東シナ海では沖合域は前年並みで平年を下回り、沿岸域は前年並みで平年を上回る。
日本海では前年・平年を下回る。
- (2) マサバ: 東シナ海では沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。
日本海では前年並みで平年を上回る。
- (3) ゴマサバ: 東シナ海では沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年並みで平年を下回る。
- (4) マイワシ: 東シナ海では前年・平年を上回る。日本海では前年並みで平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ: 東シナ海では前年・平年を上回る。
- (6) カタクチイワシ: 東シナ海では前年並みで平年を下回る。

※「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当: 企画調整部門(横浜) 上原

漁況: 浮魚資源部(長崎) 大下、高橋

海況: 海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話: 095-860-1600(長崎)、ファックス: 095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

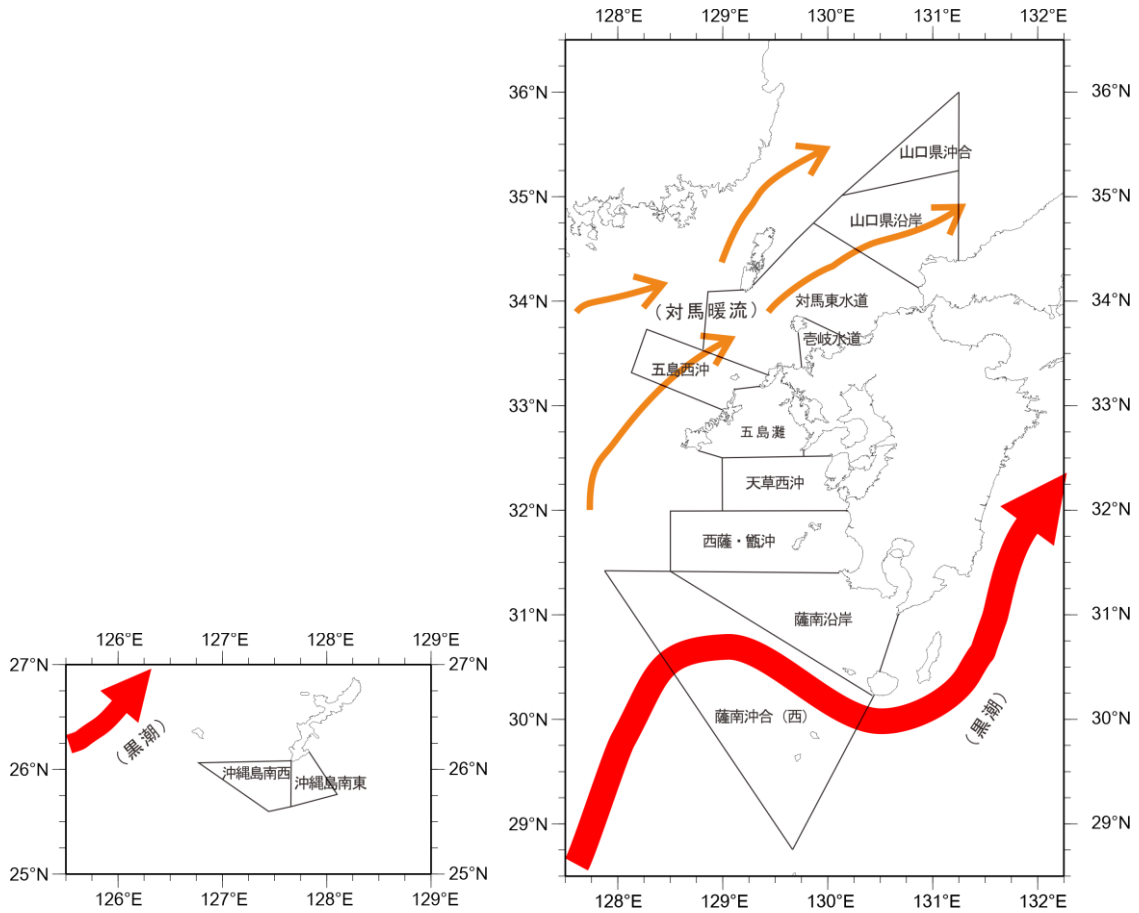


図1. 海況（沿岸）

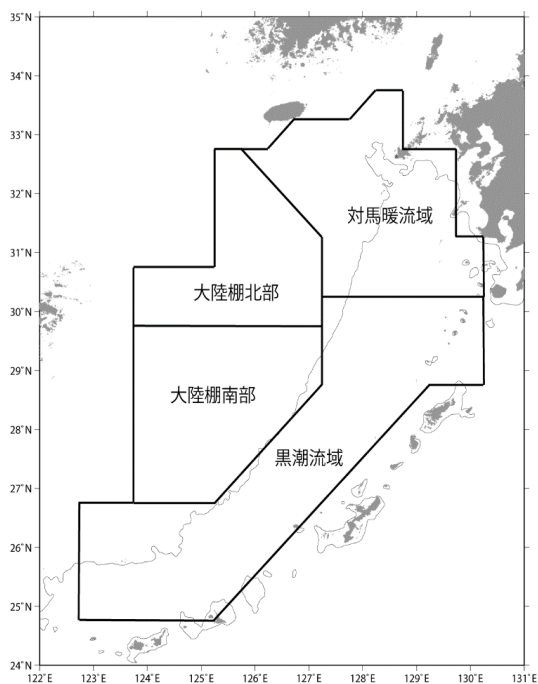


図2. 海況（沖合）

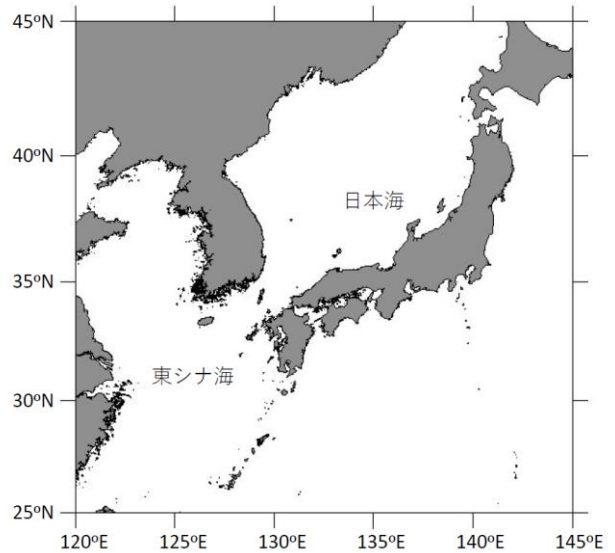


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は「やや高め」～「かなり高め」で経過する。

2. 経過（2023年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月～8月「やや高め」、9月「はなはだ高め」。

南部：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6・7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「はなはだ高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4・5月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」、6月は「接岸傾向」、7月～9月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

4月～6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「はなはだ高め」、5・7月「やや高め」、8月「かなり高め」、9・10月「はなはだ高め」。

山口県沿岸：4月「はなはだ高め」、5月「平年並み」、7月～9月「やや高め」、10月「はなはだ高め」。

対馬東水道：4月「かなり高め」、5月「平年並み」、6月～8月「やや高め」、9月「かなり高め」、10月「はなはだ高め」。

壱岐水道：4月「はなはだ高め」、5月「やや高め」、6・7月「かなり高め」、9月「やや高め」、10月「はなはだ高め」。

五島西沖：6月「かなり高め」、8月「やや高め」。

五島灘：4月「やや高め」、6月「かなり高め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」、10月「やや低め」。

西薩・甑沖：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4・5月「平年並み」、8月「やや低め」。

沖縄島南東：4・6・7月「平年並み」、8月「かなり低め」、10月「かなり高め」。

沖縄島南西：4・6・7月「平年並み」、8月「やや低め」、10月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4月「やや低め」、5月「平年並み」、7・8月「かなり低め」、9月「やや高め」、10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや低め」、5月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「平年並み」、9月「やや高め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや低め」、5・6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月～10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「やや低め」、5月「かなり低め」、6月「はなはだ低め」、7・9・10月「平年並み」。

五島西沖：6月「平年並み」、8月「やや高め」。

五島灘：4・6・8月「平年並み」。

天草西沖：4・5月「やや低め」、6・8月「平年並み」、10月「やや高め」。

西薩・甑沖 : 4月「やや低め」、5月「かなり低め」、8月「平年並み」。

薩南沿岸 : 4・5・8月「やや低め」。

薩南沖合 : 4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。

沖縄島南東 : 4月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「かなり低め」、10月「平年並み」。

沖縄島南西 : 4月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「かなり低め」、10月「やや低め」。

3. 現況 (2023年10月中旬)

1. 大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「やや高め」。

2. 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「やや高め」。

3. 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年並みで平年を下回り、沿岸域は前年並みで平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：16～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、10～16cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980年代から1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移し、2022年の資源量は46万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年4月～8月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、東シナ海中・南部であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1万3千トンで前年（2022年4月～8月、2万トン）、平年（過去5年の平均値、1万7千トン）を下回った。なお、さば類の漁獲規制により、マアジの操業にも影響が出た可能性がある。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。漁獲の主体は20～25cmの2

歳魚、12～20cmの1歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2021年級群の豊度は2020年級群並みで、2022年級群の豊度は2021年級群を下回るとみられる。2023年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、新規加入量調査などから判断すると2022年級群を下回るとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される、2022年11月～2023年3月には、沖合域では2歳魚以上が主体となって漁獲されるなど、漁獲物の年齢構成に変化がみられた。各年級の豊度から全体の来遊量としては前年を下回るが、直近の漁況から判断して、沖合域では低調だった前年並みで平年を下回る。沿岸域では直近の漁況から、1歳魚主体に来遊が平年を上回っているとみられることから、前年並みで平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。全体の年級豊度が前年を下回るとみられることから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）に加えて、32cm以上の2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲される。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。2019年・2020年は加入量が減少したが、2021年は回復し、2021年の資源量は53万トンと推定されている（なお、2023年度の資源評価は2023年12月に実施される予定）。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降、8万～10万トンの水準である。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年4月～8月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は1万トンで前年（8千トン）を上回り、平年（1万トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年を上回り、平年並みであった。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を上回り、平年並みであった（表1）。漁獲の主体は26～40cmの1歳魚以上で、5月以降は25cm以下の0歳魚がそれに加わった。

なお、一部の期間、大中型まき網漁業および長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表2）。漁獲の主体は26～42cmの1歳魚以上で、7月以降は25cm以下の0歳魚が加わった。なお、一部の期間、島根県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況から判断すると、2021年級群の豊度は低かった2020年級群を上回るとみられる。また2022年秋以降の安定した漁況から判断すると、2022年級群の豊度は2021年級群並みとみられる。2023年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況や卵稚仔調査の結果から判断して、2022年級群並みとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度が前年並みとみられることから判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は比較的多く、前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）に加えて、2歳魚以上（中銘柄以上）が漁獲の対象となる。各年級の豊度から全体としては前年並みもしくは上回るとみられ、また2023年4月～8月の漁況も好調であったことから、11月～3月期の来遊量は好調だった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並みで、沿岸域は前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中部、五島灘・薩南、対馬沖が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および30～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では20～35cmの0歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移していたが、2018年の21万トンから2019年に10万トンに急減した。2021年は13万トンとやや増加した（なお、2023年度の資源評価は2023年11月に実施される予定）。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2021年は2万4千トンであった。

2. 漁況の経過

2023年4月～8月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中・南部と五島灘・薩南であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は1万トンで前年（8千トン）を上回り、平年（1万トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年・平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は25cm以下の0歳魚と28～40cmの1歳魚以上であった。

なお、一部の期間、大中型まき網漁業および長崎県の沿岸漁業で漁獲枠の制限による操業の自粛があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群並み、2022年級群の豊度は2021年級群並みとみられる。2023年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況などから判断して、2022年級群並みとみられる。

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。沿岸域では2歳魚以上（小銘柄以上）も漁獲される。漁獲量の大半を占める0歳魚の年級豊度が前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。沿岸域の来遊量は2023年4月以降の漁況から判断して、低調だった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）、3歳魚（2020年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：14～17cmの0歳魚（小・中羽銘柄）主体に、18～23cmの1歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部、後半に日本海西部～中部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：12～17cmの0歳魚（小・中羽銘柄）に加えて、18～23cmの1歳魚以上（中・大羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年は100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万4千トンとなった。その後は横ばい傾向にあり、2022年は7万1千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2023年4月～8月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、全ての県で前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は前半は17～22cmの1～3歳魚、後半は15cm以下の0歳魚であった。

(2) 日本海

2023年4月～8月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。海域別に見ると、青森県など日本海北部では前年・平年を上回ったが、日本海中部および西部では前年・平年を下回った。なお、日本海西部では一部の期間、漁獲枠の制限による操業の自粛があった。漁獲の主体は前半は16～22cmの1～3歳魚、後半は15cm以下の0歳魚であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群を上回り、2021・2022年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2023年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、卵稚仔調査から判断すると、2022年級群を上回るとみられる。

(1) 東シナ海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。漁獲の主体となる0・1歳魚の直近の漁況が好調であることから、引き続き東シナ海における来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、11月～3月期の前半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が漁獲される。近年は漁期後半に来遊する1～3歳魚の来遊量と滞在期間が漁況に大きな影響を与えている。漁獲の主体となる1～3歳魚（2020～2022年級群）の豊度が前年並みもしくは上回ると考えられることから、日本海における来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））、1歳魚（2022年級群）、2歳魚（2021年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年～1984年に減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年の2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後、減少して2022年の資源量は9万1千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976年～1998年には毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半～1990年代前半は4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半～2000年に1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017～2019年の漁獲量は3万1千～3万9千トンで変動し、2020年は2万トンと大きく減少したが、2022年は4万2千トンとなった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を上回った（表1）。漁獲の主体は5～10cmの0歳魚および15～25cmの1・2歳魚であった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。2023年4月～8月の漁況の経過から、2022年級群の豊度は2021年級群を上回ると考えられる。2023年級群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の漁況や卵稚仔調査の結果から判断すると、2022年級群を上回ると考えられる。したがって、東シナ海における来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2023年11月～2024年3月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2023年級群（2023年生まれ））・1歳魚（2022年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県および長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2022年11月～2023年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2023年4月～8月）および見通し（2023年11月～2024年3月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったがその後減少し、2022年には10万7千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンとなった。2016年以降は減少傾向にあり2022年には3万8千トンとなった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は4月～6月には4～10cmの0・1歳魚であったが、7月は8～10cmの1歳魚、8月は3～6cmの0歳魚と10～15cmの2歳魚となった。

3. 今後の見通し

例年、11月～3月期には0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となり、1歳魚（大羽銘柄）が混じる。卵仔稚調査の結果や直近の漁況などから判断すると、2023年級の春季発生群の豊度は2022年級群並みと考えられる。2023年級の秋季発生群の豊度の評価は現段階では難しいが、直近の不漁を考慮すれば、2022年級群並みもしくは下回ると考えられる。漁獲の主体となる2023年級の豊度が前年並みもしくは下回ることから、東シナ海における来遊量は低調であった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

表 1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2023年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は971トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比70%、平年比126%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は123トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比6%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は2,949トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比88%、平年比74%）。
熊本 牛深港	漁獲量は18トンで、前年・平年を下回った（前年比16%、平年比28%）。	漁獲量は667トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比43%、平年比87%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は4,614トンで、前年・平年並みであった（前年比94%、平年比111%）。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は4,930トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比90%、平年比127%）。	
佐賀	漁獲量は98トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比104%、平年比79%）。	漁獲量は15トンで、前年・平年並みであった（前年比111%、平年比86%）。	
福岡	中型まき網による漁獲量は379トンで、前年・平年を上回った（前年比159%、平年比140%）。漁獲のうち、中・小銘柄が24%、ゼンゴ銘柄が73%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は5トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比182%、平年比71%）。	中型まき網による漁獲量は1,249トンで、前年・平年を上回った（前年比307%、平年比383%）。漁獲のうち、中・小銘柄が9%、マメ銘柄が92%であった。棒受網での漁獲はなかった。	中型まき網による漁獲量は19トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比105%、平年比214%）。
山口	中型まき網による漁獲量は1,268トンで、前年・平年を上回った（前年比177%、平年比138%）。	中型まき網による漁獲量は1,889トンで、前年・平年を上回った（前年比132%、平年比219%）。	

注：「前年」は2022年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。鹿児島県のゴマサバの漁況経過にはマサバの記述も含む。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網では、4・5月に中羽～大羽(2021・2022年級群)主体に縄瀬、天草西沖で、7・8月に小羽～中羽(2023年級群)主体に甑東で漁獲された。まき網による漁獲量は2,399トンで、前年・平年を上回った(前年比31,733%、平年比1,961%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は378トンで、前年・平年を上回った(前年比1,545%、平年比858%)。	主要4港のまき網では、4月に中羽～大羽(2022年級群)主体に立目崎沖で、その後、小羽～中羽(2023年級群)主体に5・6月に野間池沖、7・8月に甑東で漁獲された。まき網による漁獲量は1,142トンで、前年・平年を上回った(前年比242%、平年比145%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は370トンで、前年・平年を下回った(前年比46%、平年比48%)。	主要4港のまき網では、中羽～大羽(2022年級群)主体に、5・6月に八代海、7・8月に甑東で漁獲された。まき網による漁獲量は798トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比137%、平年比88%)。北薩海域における棒受網による漁獲量は229トンで、前年・平年並みであった(前年比105%、平年比86%)。
熊本 牛深港	漁獲量は1,909トンで、前年・平年を上回った(前年比15,326%、平年比1,802%)。	漁獲量は662トンで、前年・平年並みであった(前年比104%、平年比90%)。	漁獲量は663トンで、前年・平年を下回った(前年比38%、平年比27%)。
長崎	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は8,659トンで、前年・平年を上回った(前年比180%、平年比723%)。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は9,083トンで、前年・平年を上回った(前年比500%、平年比430%)。	地域により差があるが、中型まき網による漁獲量は1,135トンで、前年・平年を下回った(前年比36%、平年比28%)。
佐賀	漁獲量は1.5トンで、前年・平年を上回った(前年比344%、平年比1,047%)。	漁獲量は0.1トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比200%、平年比33%)。	漁獲量は2トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比186%、平年比28%)。
福岡	中型まき網による漁獲量は81トンで、前年・平年を上回った(前年比854%、平年比1,111%)。棒受網の漁獲はなかった。	中型まき網による漁獲量は82トンで、前年を下回り、平年を上回った(前年比57%、平年比184%)。棒受網での漁獲はなかった。	中型まき網および棒受網での漁獲はなかった。
山口	中型まき網による漁獲量は17トンで、前年・平年を上回った(前年比216%、平年比336%)。湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は992トンで、前年・平年を上回った(前年比85,548%、平年比8,999%)。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は小・中羽主体に37トンで、前年・平年を上回った(前年比173%、平年比233%)。	湊地区の棒受網・すくい網による漁獲量は小羽・中羽主体に29トンで、前年・平年を下回った(前年比9%、平年比7%)。

注：「前年」は2022年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

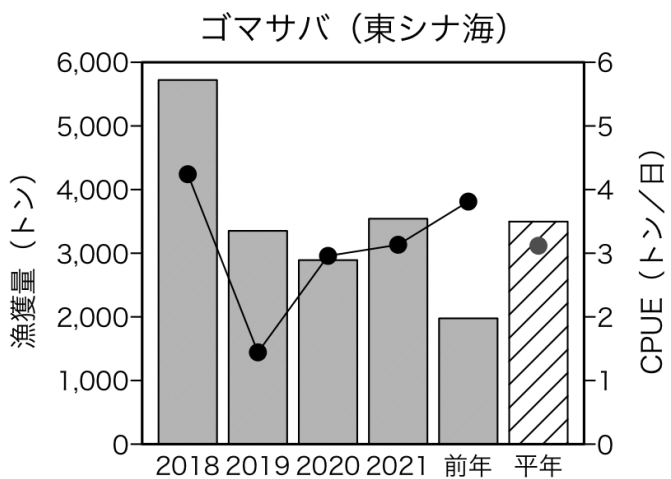
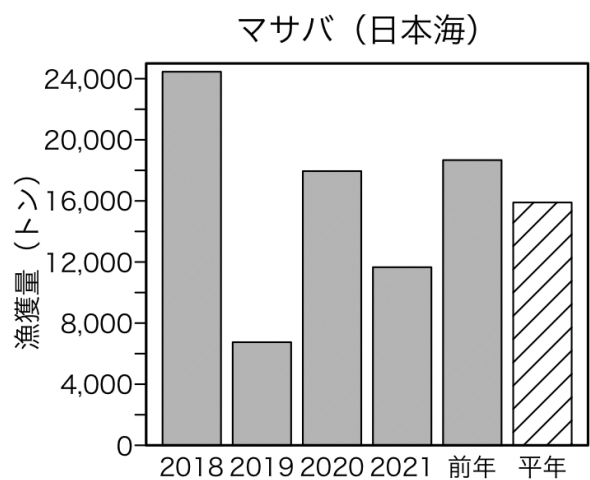
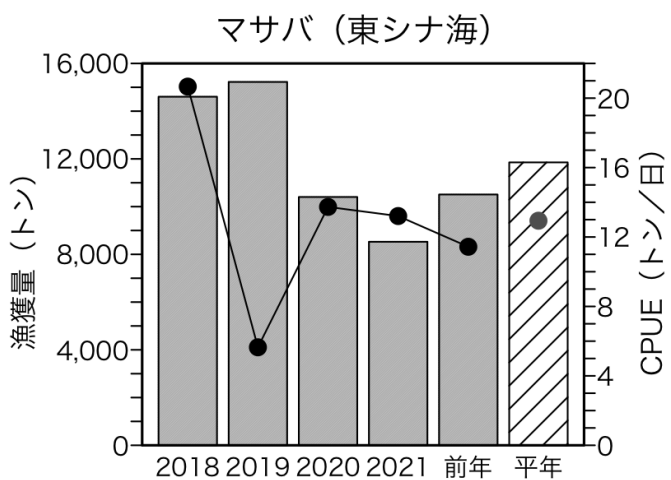
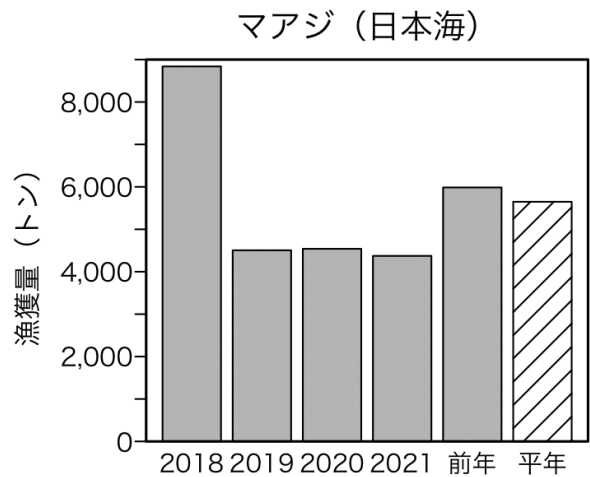
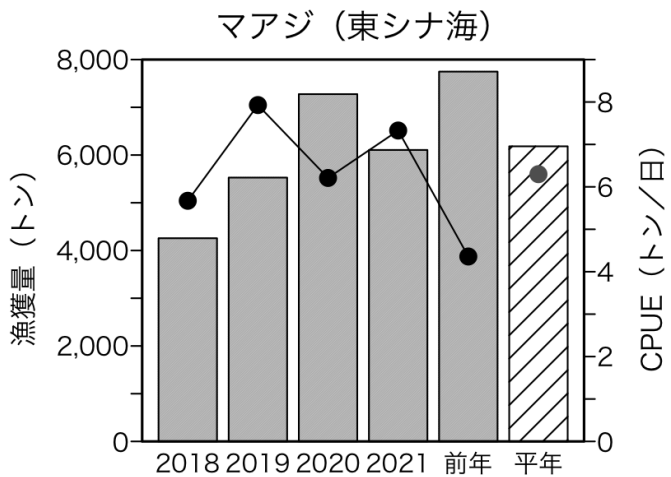
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2023年4月～8月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は393トンで、前年・平年を下回った（前年比63%、平年比45%）。	漁獲量は1,102トンで、前年・平年を上回った（前年比223%、平年比192%）。	漁獲量は4トンで、前年・平年を下回った（前年比9%、平年比18%）。
鳥取	漁獲量は3,043トンで、前年・平年を下回った（前年比51%、平年比38%）。	漁獲量は16,666トンで、前年・平年を上回った（前年比148%、平年比261%）。	漁獲量は11,360トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比64%、平年比84%）。
兵庫	漁獲量は63トンで、前年・平年並みであった（前年比91%、平年比99%）。	漁獲量は6トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比290%、平年比108%）。	漁獲量は0.2トンで、前年・平年を下回った（前年比1%、平年比3%）。
京都	漁獲量は262トンで、前年・平年並みであった（前年比84%、平年比97%）。	漁獲量は416トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比109%、平年比250%）。	漁獲量は3トンで、前年・平年を下回った（前年比1%、平年比3%）。
福井	前年・平年並みであった（前年比89%、平年比90%）。	前年並みで、平年を上回った（前年比82%、平年比218%）。	前年・平年を上回った（前年比720%、平年比949%）。
石川	前年並みで、平年を下回った（前年比92%、平年比76%）。	前年並みで、平年を上回った（前年比95%、平年比181%）。	前年・平年を下回った（前年比79%、平年比24%）。
富山	漁獲量は302トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比126%、平年比58%）。	漁獲量は1,084トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比89%、平年比203%）。	漁獲量は44トンで、前年・平年を下回った（前年比15%、平年比2%）。
新潟	前年・平年を下回った（前年比67%、平年比75%）。	前年・平年並みであった（前年比82%、平年比86%）。	前年・平年を下回った（前年比7%、平年比3%）。
山形	漁獲量は40トンで、前年・平年を下回った（前年比57%、平年比67%）。	漁獲量は7トンで、前年・平年並みであった（前年比83%、平年比109%）。	漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比32%、平年比27%）。
秋田	前年を上回り、平年並みであった（前年比123%、平年比107%）。	前年を下回り、平年を上回った（前年比67%、平年比196%）。	前年・平年を上回った（前年比1,502%、平年比214%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は74トンで、前年・平年を上回った（前年比154%、平年比224%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は161トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比26%、平年比94%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は1,667トンで、前年・平年を上回った（前年比133%、平年比139%）。

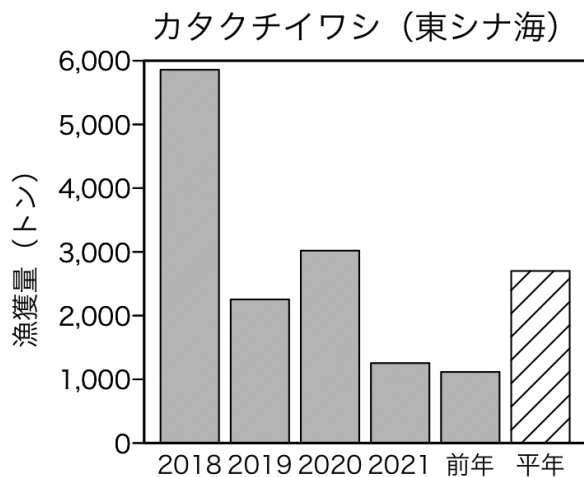
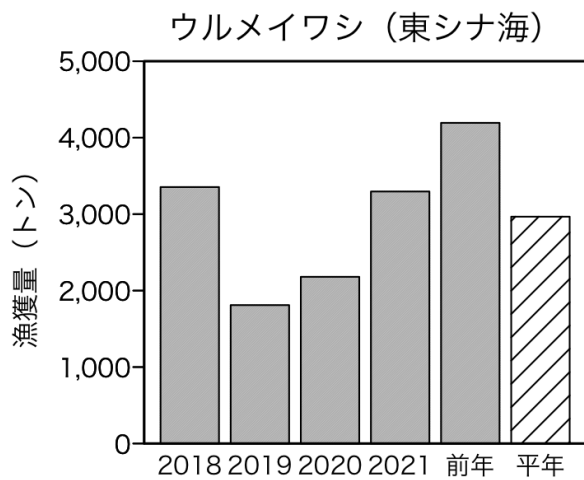
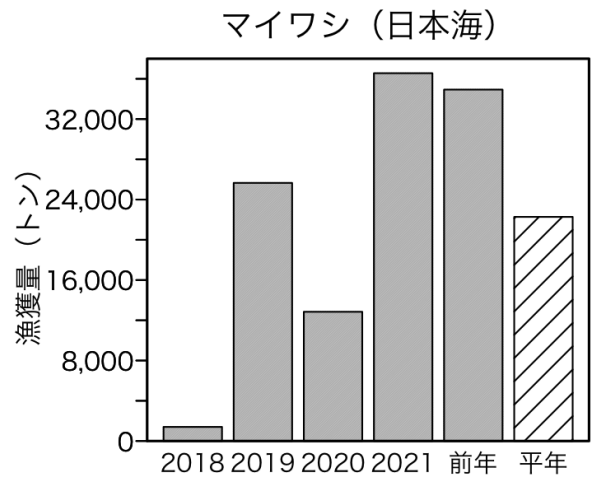
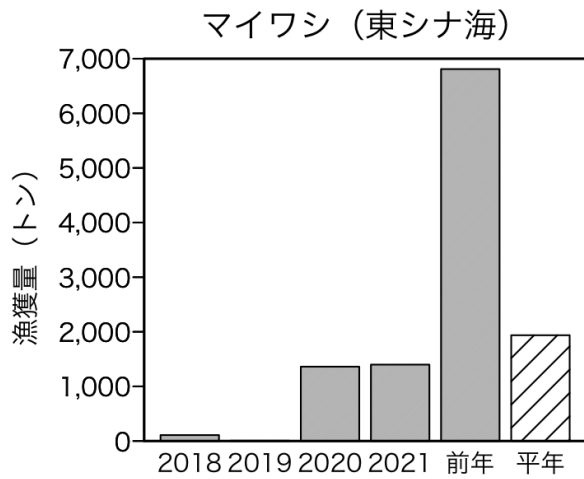
注：「前年」は2022年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所